PROJECT

処世法としての「非境界」

文
堀内正樹

共同研究 ● 非境界型世界の研究──中東的な人間関係のしくみ（2010-2013）

エドモントン（カナダ）のアル＝ラシッド・モスク（1938 年建立）：ウクライナ人の建築家が建てたので、ロシア系の教会に似た外見をしている（2012 年、池田昭光撮影）。

2010 年秋から始まった本プロジェクトは 3 年半の研究期間の終盤を迎え、本稿執筆時点であと 1 回の研究会を残すのみとなり、2014 年 3 月で幕を閉じる。この間これまでに計 10 回の研究会を行ってきて、7 回目までの内容はすでに本通信で報告した（『民博通信』132、135、139 号）。今回は続く 8 回目から 10 回目までの研究会の様子を報告するとともに、このプロジェクトの今後の見通しについて記したいと思う。

研究会報告

まず各回の発表テーマは以下の通りである。

＜第 8 回＞（平成 24 年 7 月 21 ～ 22 日）
「中間総括：問題の再定義」（全員）
「中間総括：非境界的研究指針について」（全員）
＜第 9 回＞（平成 25 年 1 月 26 ～ 27 日）
「イスラエル調査報告」（錦田愛子 / 東京外国語大学）
「見せる顔、隠される顔：非境界型世界の末端から」
（特別講師・佐久間寛 / 東京外国語大学）
「マリ共和国南東部セヌフォ社会における夢と埋葬儀礼」
（特別講師・溝口大助 / 九州大学）
「非境界型世界をどう表現すべきか」（堀内正樹 / 成蹊大学）
＜第 10 回＞（平成 25 年 10 月 19 ～ 20 日）
「中世のアラブ地理学とサハラ以南アフリカ」
（苅谷康太 / 東京外国語大学）
「共同研究の成果のとりまとめについて」（全員）

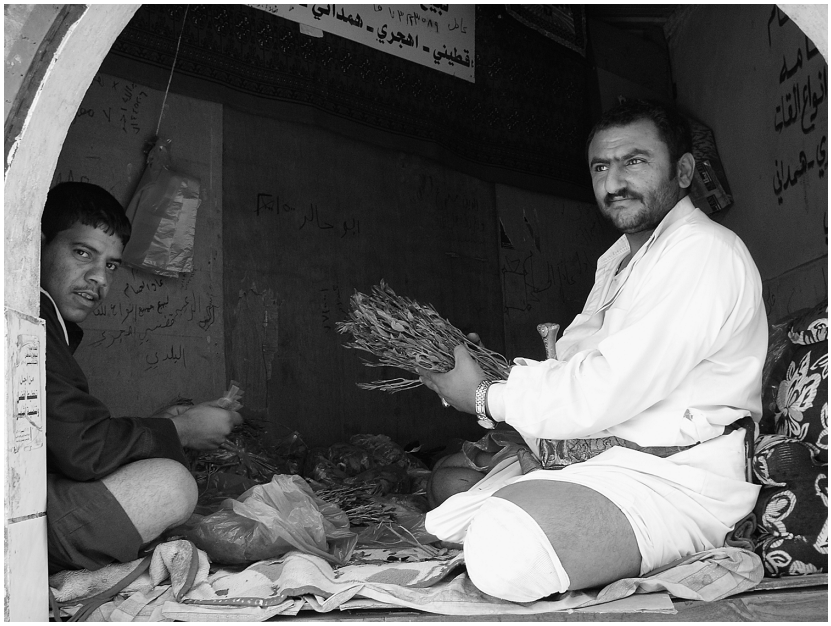
第 8 回の全員による中間総括では、研究会発足当初からメンバーのあいだで議論されてきた「境界型世界と非境界型世界」のとらえ方の相違に焦点があたった。端的にいえば、国家や宗教や民族や部族や言語といったもののあいだの違いを「境界」と考え、人々がそれらの境界を越えて活動するいわゆる越境状態を「非境界型世界」とイメージするメンバーもいれば、そうではなくて、そもそも人間や社会や文化や情報を切り分けて、それぞれを別々のかたまりに整序してゆく近代西欧的な認識方法を「境界的思考」とし、そうした思考方法に絡め取られないもっと柔軟な思考状態を「非境界型世界」と考えるメンバーもいて、このニュアンスの違いは中間総括の段階でもそう簡単には埋まらなかったように思う。要するに視線を対象に向けるか自己に向けるかという違いだが、議論を進めるうちに、両者は相互に照らし合うすでに馴染みの弁証法的プロセスのようなもので、不即不離の関係にあることが共通の理解になりつつあるように見えた。

第 9 回の研究会ではまず、これまでパレスチナ人について研究してきた錦田愛子がイスラエル滞在を終えて帰国し、成果を報告した。錦田がイスラエルで新たに発見したのは、シオニズムをはじめとして、どうしても越えがたい幾重もの可視的な政治的・軍事的・社会的・イデオロギー的な壁が堅固に存在しているという、絶望的なまでの境界的な状況であった。そしてその壁がさまざまに異なったポジションに置かれた人々に複雑な影響を与えている。たとえばパレスチナ独立国家構想に関して、イスラエルの二級市民となっているイスラエル国籍をもつパレスチナ人が自身の経済状況の悪化を恐れて 2 国家独立案を嫌い、イスラエル 1 国論を支持したり、あるいは逆に右派シオニストのユダヤ人がシオニズム体制維持のために 2 国家独立案を支持するといった、思わぬ帰結をもたらす例を挙げ、壁ないし境界にがんじがらめに拘束された状況下で人々がいかに生きるのか、その解明を今後の課題とした。19 世紀の西欧製の境界型思考システムを今日も忠実に体現し続けるイスラエル（シオニスト）国家は、境界型世界がいったい人間に何をもたらすのかを明瞭に提示してくれ

る反面教師的な意味をもつと考えてよいだろう。

次にこの第 9 回研究会では、以前から本研究会に関心を寄せていただいていた 2 名の特別講師を外部から招き、「顔」や「境界」の可視化と不可視化という重要な問題に関する知見を求めた。そのうちの 1 人、佐久間寛は、我々が「非境界型世界」の主要な特徴として挙げた「具体的な顔をもった人間関係が社会の主役」という点を突き、「顔」を隠すことも人間関係の重要な側面であることを示した。佐久間が提示したのは、ニジェールで政府が稲作農地を確保するために進めた灌漑プロジェクトの土地管理をめぐる人間関係であり、地元で管理にあたる協同組合の代表が、農民に制裁を科すときには代表者たちの合議ということにして匿名化する、つまり「顔」を隠すのに対し、そうした制裁を解除・無効化して温情的措置を講ずるときには自分の名前を出す、つまり「顔」を見せるのだという。

もう一人の特別講師、溝口大助は、マリ南東部のセヌフォ社会でのフィールドワークの詳細なデータをもとに、葬送儀礼や埋葬儀礼の執行に伴って現れる生と死の境界や社会空間の境界を強調し、境界的思考なしには社会的相互行為は成り立たないと論じた。ただし人々の普段の生活世界は境界にこだわらない融通無碍な意識によって支えられているとし、境界的思考と非境界的思考の二元性を維持するためのメタ・レベルでの思考が必要なのではないかと指摘した。



サナア（イエメン）のカート商人：扱っているカートの生産地が壁に書いてある（2005 年、大坪玲子撮影）。

こうした指摘を受けて、私（堀内）はあらためて「非境界型世界」をどのように表現すれば相互の理解が確実なものになるか、また問題の所在を明確化するためにはいかなる表現様式がふさわしいかを整理した。「こうすればよい」というモデル的な表現方法はないものの、各人が「非境界」を主題化するプロセスがそれぞれにふさわしい形を生み出してゆくはずである。

第 10 回は苅谷康太が、中世アラブ世界で生み出された知識人たちによる地理的な「境界」認識を詳述し、もし西アジアから北アフリカにかけての地域を非境界型世界とするならば、その世界はサハラ以南アフリカを外部として位置づけることによって成立していたのではないかと論じた。つまり「非境界」的状況は内部状況であって、内部があるからには外部が必要になるという。オリエンタリズムとの相似を彷彿させた。「非境界」が「境界」をもつかという議論は検討課題となろう。

今後の見通し

9 回目と 10 回目の研究会では、上記のように「非境界」という考え方に釘をさす発表が並んだ。健全なことだと思う。そしてそれぞれに妥当な主張だと思う。そこで考えたいのは、「ものを識別する」ということと「境界線を引く」ということの違いである。掲載した写真に即していおう。

池田昭光（東京外国語大学）提供の写真のモスクがロシア正教的な建物であるのは一目瞭然である。カイロのフセイン・モスクやメッカのハラーム・モスクなどとの建築様式上の違いを識別できない人はまずいない。「だからこの建物では礼拝しない」となればそこには境界ができあがるが、実際にそのような人はいない。

大坪玲子（共立女子大学）提供の写真で売られているカート（噛むと軽い覚醒作用が得られる葉）は、売り手も買い手もその産地や鮮度、種類などの違いに非常に敏感で、識別には大いにこだわるが、「だからこの商人から買い、あの商人からは買わない」ということにはならない。むしろ大坪が「浮気性」的な人間関係と表現する、固定しない人間関係が要求される。

世界がおびただしい数の違いからできているのはいうまでもない。そして違いを識別することはすべての人間に共通する。問題は、そうした違いにどのように対処するかという「処世法」の差異に発するのだと思う。もし「違い」を「境界」と考えるのならば、およそ人類社会はいずこであってもことごとく「境界型世界」である。そうではなくて、いくつもの違いを文脈無視で硬直的・短絡的に重ね合わせてゆけば境界が立ち上がってくるのに対して、臨機応変に「それはそれ、これはこれ」と的確に対処してゆけば境界は現れない。現象学的にいえば、問題はノエマではなくノエシスに存する。複数の違い（ノエマ）をどのように結びつけるか、あるいは切り離すか、という過程・方法・流れ（ノエシス）のあり方の相違が「境界型世界」と「非境界型世界」を分かつ分岐点なのだと思う。そう考えることによって、本プロジェクトは終了後も多方向に向かって生産的に発展してゆくだろう。

ほりうち まさき

成蹊大学文学部教授。専門は社会人類学。中東・北アフリカの社会と文化を研究。著書に『アラブの音文化：グローバル・コミュニケーションへのいざない』（共編著 スタイルノート 2010 年）、『世界の砂漠：その自然・文化・人間』（共著 二宮書店 2007 年）など。